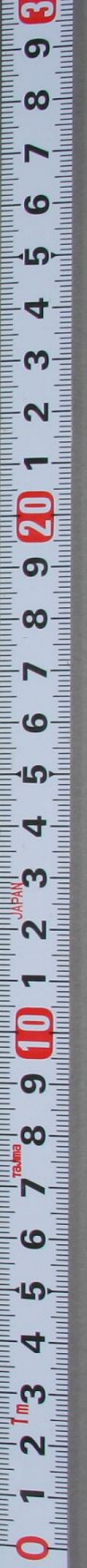




貞丈雜記

十下

73
6592
20



門 7 3  
6592  
卷 20

一本ニシテ...  
あるハ...  
アフレハ...



一本ニシテ...  
あるハ...  
アフレハ...

一本ニシテ...  
あるハ...  
アフレハ...

一本ニシテ...  
あるハ...  
アフレハ...

一本ニシテ...  
あるハ...  
アフレハ...

一本ニシテ...  
あるハ...  
アフレハ...

一本ニシテ...  
あるハ...  
アフレハ...

一本ニシテ...  
あるハ...  
アフレハ...

一本ニシテ...  
あるハ...  
アフレハ...

一本ニシテ...  
あるハ...  
アフレハ...

一本ニシテ...  
あるハ...  
アフレハ...

一本ニシテ...  
あるハ...  
アフレハ...

昭和九年四月...  
贈

雑記十

四十三

やまてとあり又は同系 小八宗長の矢をたてさうりつしま  
ありてと何々左の手尻の上と載せ右の手とひきうあま  
先へつきやう有爪遣と云ふ盛衰記は爪遣の二字を用ひ  
しう万葉集の歌は梓弓尻夜者遠音と有り爪遣と云  
ふべしやまもしうも五音相違あり

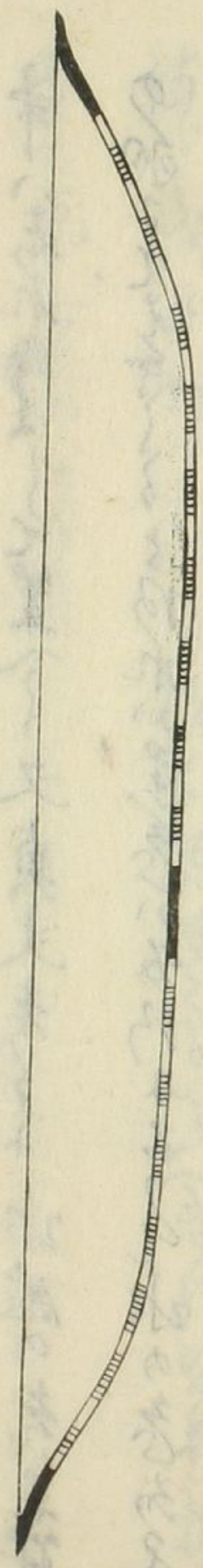
一 久志のの幸平家物語は留巻ラツマキより一巻ぞうかひ  
和田小太郎平義盛と云ふも書付も云ふ盛衰記  
羽本寸斗置て三浦少左郎義成と焼後ヤキエと云ふ又  
同書は黒塗の之の十四本あるを只今うりてをらりし  
て新居紀四郎宗長と書付ニ件ノキ又東鑑ノクツマキは前口巻之上ニ件ノキ

瀧口三郎藤系経俊ト云ふ又太平記はお松國住人本間  
孫四郎重氏と小刀のやまきと書けりけり馬故実  
云々不のり三方は書は是ハ平人合共法と云ふありと  
の草の書は書ハ賞覧しこれより賞覧ハせけりの書は  
書とありてその書はせけりの書は出耐い走り羽の通り  
一方は書ハ一惣別名系斗かかあり南世ハ國而もその名字官  
それの内は誰と我名を書中ハ本武ハありて之を賞覧  
犬道物は云犬村と云ふ久平をすハ矢を問合耐入り  
羽中ありと云ふもせげりシキ羽中の外ハ目と云ふ  
羽中ハ何と云ふ我心ハ何と云ふ物を書きとされと云ふ

縁ある地を能くある人三日月の戌の時のとて仕るゝの以上の紋也  
 多く真丈按る不志平書所ハ羽中おとら地帯はけあぐまき  
 又ハ焼陰焼下の百も此の漆もそり書く墨もそり如小刀の先もそり  
 書く又と所羽本一寸半のけても書皆巻より上り書い  
 又國所まの官名字これの内誰と書いこらしと云ハ的矢  
 多帯は射る矢のみこ是ハ名乗斗書一軍陣の征矢ハ國  
 所まの名字以下書く市書一如以て敵の如せんが  
 犬追物のの矢もそりは紋もそりるハ人馬ハ我名をめがせま  
 ぬるこぞ紋ハ家の定紋を云ハ何ぞ何ぞもを元を指す  
 一 後三年の陰は足元より弓袋花の如

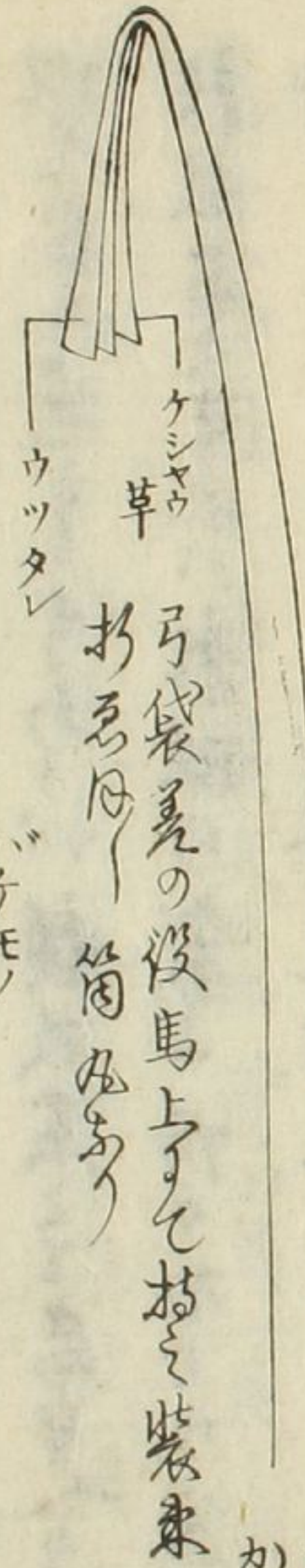
かゝる馬花の如

後のあげきもあつたきとあり  
 此圖ハ志ハキあり



一 後三年の陰は足元より弓袋花の如

此下外の陰は  
 かくして足元



ケシヤカ 草  
 弓袋差の役馬上下を掛く装束  
 折る所 筒ぬあり

一 源三位頼政がぬえと云妖物を射る如 弓をハ雷上動と

名づけ二ののろろ矢をハ水破ヒヤウハ兵破と名づけより水破と云  
 矢ハ表鬘の羽を以てもぎ兵破と云矢をハ山香の羽と云  
 まきたりと源平盛衰記ハ見元より雷上動の弓ハいう如

の物も之を知らず知らず〜時弓矢の名いふ所の物も知らず〜  
頼政は名を以てて其後世に傳へしれは正統の初めぬるも  
推量をして以てしるは秋世の考案の相款の考案といふ儒者の考案  
雷と動の頼政は政へ〜といひりげも頼政の好むを  
以て名を考へしるありは頼政と名を考へしれされとも  
頼政と名を考へしれは頼政の家より考へしるありは  
頼政も頼政と名を考へしれは頼政も考へしるありは  
半は考へしれぬ〜と置へ〜又貞丈考へしるは水破の考へしる  
の羽も考へしるありは水破の考へしるありは水破の考へしるありは  
水破といふは水破又水破の山考の羽も考へしるありは水破の考へしるありは

山鳥の尾ハ思き又あり〜  
豹の皮の考へしるありは水破の考へしるありは  
水破といふは水破又水破の山考の羽も考へしるありは水破の考へしるありは  
量の説く定め〜

一 浦き矢といふ矢有り是浦き矢子取具考へしるありは〜  
延喜式の内兵庫寮式に云箭四具一具ハ角大伊多都伎  
一具ハ角細伊多都伎一具ハ木大伊多都伎一具ハ麻麻伎各五  
十隻 為一具具別切五十人有り又鐵十二兩二分熟銅二分  
已上麻麻伎鐵 料用寮家物 同書に見る麻麻伎箭を伊多都伎と一  
は載せしるを以て考へしるありは麻麻伎箭を伊多都伎と一  
〜と鉄又ハ銅といふ矢尻を作るもの矢あり〜海き矢

弓矢射の巻へ

一 博くき弓といふ弓あり源順が倭名抄に細射の二字を

してタウリヤウ唐令の内ロホリヤウ鹵簿令の細射サイシヤキウセン弓矢といふを引いて今

按此間マ、キユミ萬萬岐由巻と名づくといふ又カトビフセウ江表記の

真卷マ、キユミ弓矢と記し又宇治拾遺物語に門部府生と云舎ト子

人曰くして才負ウリユミゆが為は博くきを好て能く射るれ其

事朝廷に傳えて賭射の射あはウリユミ百されしと傳し事

見へり又古事談に中院入道は六の能あり才一和歌才二

双六才三末マ、キ木才四姦曲才五筆才六職者也シシヤカと自稱せり也

しるべきなり又園エンガイリヤク大曆ロシボク或人真卷マ、キ弓といふは

書名也

或は小弓といふ或は大弓といひ侍と中國入道相國は尋

すいせりは予が重祿に真マユミ弓は藤及樺カバを考ふればかといふ

也近代は紙を以て成樺はかると考へ強ひるゝといふ

是を以て思ふに延久文安のけマユミ近世御官宰相定基マユミ坂新井

筑後守君義マユミはき弓のり尋ねる事マユミせりれば真卷マユミ或は真

樺ともやゆマユミ弥の字ハ字書マユミのハ把中ハチナカと詔しは和訓マユミのりうちマユミ

平家物語才九マユミ曰志けごうの弓のとりうちの本をかき

ひろき一寸むらうを切てたマユミまきマユミはほきマユミなりこれだけかの大將

軍の志マユミとみえしこれ則真樺のりマユミは白檀紙マユミ或は紙マユミ

を紙青唐紙マユミ亦用之マユミと野マユミ多敷マユミ答マユミあひマユミ是又園マユミ大曆

の脱は同一紙友擇ありを考ふるるとさういひ世無門教府生  
又中院入道の浦くまを能射しりと云は友擇成ありと考ふる  
考ふるよりあるも別は浦くまといふ考ありしをこれ能射  
考ふる真丈云浦くまのよりいふ本抄は見ざる琳賢法師の  
新見え考べ— 丈本抄は云天仁元年顯李卿家秋名琳賢  
法師いふせん浦くまの考のよりいひし考ありしは  
ありぬこと考へ  
一本はよき考ありありし考の考の考  
誤る考よりし考の考と云ふは考の考よりし  
又丈掬考ふるは秋上は浦くまの考といひしはひき考あり  
つあるぬ心と云へるより心を付へ考ふる本と考と合せし考  
考を浦くまといふありし考の自ハ擇の考といひても考へる  
天仁

浦くまの考といひしは浦くまの考といひし中の自はひき考あり  
つあるぬ考ふるは浦くまの考といひしはひき考ありし考ありし  
浦くまの考をわきまといひしはひき考ありし考ありし考ありし  
といひしは又古ハ鞠ト云物考左の腕ウデに付し射しり強し  
鞠考も古き考ふる考ありし考ありし考ありし考ありし  
考をひき考ふる考ありしはありし考ありし考ありし考ありし  
考を合せし考ありし考ありし考ありし考ありし考ありし  
考を受てあるぬ心をいひしは合せし考ありし考ありし考ありし  
考の考と又さすはこれいふ考ありし考ありし考ありし考ありし  
考ありしはありし考ありし考ありし考ありし考ありし考ありし





概弓  
夫木抄定家始  
又家集云歌平は  
又家集云歌平は  
又家集云歌平は  
又家集云歌平は

夫木抄信実朝臣  
あつさるるを  
とてす  
とてす  
とてす  
とてす

東鑑卷廿鎮西以  
下諸國進徳之荒  
木弓  
夫木抄正三位知  
家ノノ致  
つるふれぬあき  
の弓のそり  
まていつら  
むく人もふ

一 篠羽の矢古書みえり羽のきびいさきぬねしあき

あきあきいああらう黄ハ志らう志の現どきもえきいあ  
と志らうを交合むさきい何あを志らうこ水らの志のくを  
酢<sup>ス</sup>まときて黄<sup>ニツケ</sup>を漆<sup>ニツケ</sup>を布<sup>ニツケ</sup>かきこもバ又漆<sup>ニツケ</sup>ぐこも

うまも好<sup>ニツケ</sup>は隠<sup>ニツケ</sup>ふへ一酢<sup>ニツケ</sup>を自<sup>ニツケ</sup>ひぶれハ羽<sup>ニツケ</sup>の志<sup>ニツケ</sup>こもぬあ  
何<sup>ニツケ</sup>ま漆<sup>ニツケ</sup>日<sup>ニツケ</sup>も酢<sup>ニツケ</sup>ま志<sup>ニツケ</sup>のくまこへ一白<sup>ニツケ</sup>羽<sup>ニツケ</sup>を漆<sup>ニツケ</sup>え

抱<sup>ニツケ</sup>弓<sup>ニツケ</sup>柳<sup>ニツケ</sup>弓<sup>ニツケ</sup>檀<sup>ニツケ</sup>弓<sup>ニツケ</sup>柳<sup>ニツケ</sup>弓<sup>ニツケ</sup>柘<sup>ニツケ</sup>弓<sup>ニツケ</sup>弓<sup>ニツケ</sup>ハ皆<sup>ニツケ</sup>丸<sup>ニツケ</sup>木<sup>ニツケ</sup>弓<sup>ニツケ</sup>一<sup>ニツケ</sup>是<sup>ニツケ</sup>等<sup>ニツケ</sup>の  
記<sup>ニツケ</sup>三代<sup>ニツケ</sup>實<sup>ニツケ</sup>祿<sup>ニツケ</sup>延<sup>ニツケ</sup>喜<sup>ニツケ</sup>式<sup>ニツケ</sup>  
万<sup>ニツケ</sup>葉<sup>ニツケ</sup>集<sup>ニツケ</sup>其<sup>ニツケ</sup>外<sup>ニツケ</sup>也<sup>ニツケ</sup>書<sup>ニツケ</sup>見<sup>ニツケ</sup>る<sup>ニツケ</sup>

何<sup>ニツケ</sup>弓<sup>ニツケ</sup>と<sup>ニツケ</sup>び<sup>ニツケ</sup>へ<sup>ニツケ</sup>延<sup>ニツケ</sup>喜<sup>ニツケ</sup>式<sup>ニツケ</sup>弓<sup>ニツケ</sup>を<sup>ニツケ</sup>作<sup>ニツケ</sup>る<sup>ニツケ</sup>を<sup>ニツケ</sup>記<sup>ニツケ</sup>れ<sup>ニツケ</sup>る<sup>ニツケ</sup>は<sup>ニツケ</sup>角<sup>ニツケ</sup>  
の<sup>ニツケ</sup>料<sup>ニツケ</sup>束<sup>ニツケ</sup>組<sup>ニツケ</sup>集<sup>ニツケ</sup>漆<sup>ニツケ</sup>角<sup>ニツケ</sup>羊<sup>ニツケ</sup>ホ<sup>ニツケ</sup>の<sup>ニツケ</sup>弓<sup>ニツケ</sup>い<sup>ニツケ</sup>え<sup>ニツケ</sup>え<sup>ニツケ</sup>れ<sup>ニツケ</sup>る<sup>ニツケ</sup>竹<sup>ニツケ</sup>の<sup>ニツケ</sup>舞<sup>ニツケ</sup>の<sup>ニツケ</sup>名<sup>ニツケ</sup>を<sup>ニツケ</sup>記<sup>ニツケ</sup>す<sup>ニツケ</sup>

見えは竹を合て作り始りるハ何の時代誰か志始りると云  
半初れを或説は綏靖天皇の時始りといひ或は古孫王種基  
外竹を分始り一以後の人内竹を分けひこを合るといふ是ホ  
の説ハ正しき古書見見えは一向儀據りあき偽あり用り  
室町殿の時代あつた竹を合るといふは此の記録もえり  
後成恩寺兼良公の尺素継来り四方竹の弓見えり上古ハ  
木弓あり一今も玉りまけん新木白木塗木あり云何ハ  
あつた一一新竹白竹塗竹あり云何ハあきあり

一 是傳弓の弓挽役記

一 老木弓の弓義徑記  
忠信まこの  
日云去年  
文治元年也  
十月十三日京都



かすらゆきころりたれこせいつまみも亦よかの緒續こそあり  
まづひておろしこれその日の装束もあやこのせんりやうれひ  
これは大まづのむじもきまらりのえむひやまじもせう  
此方のせん中よりまき志げ及なをきげく巻く板の名く  
あきよせ及はるをこあつ押寄せをく

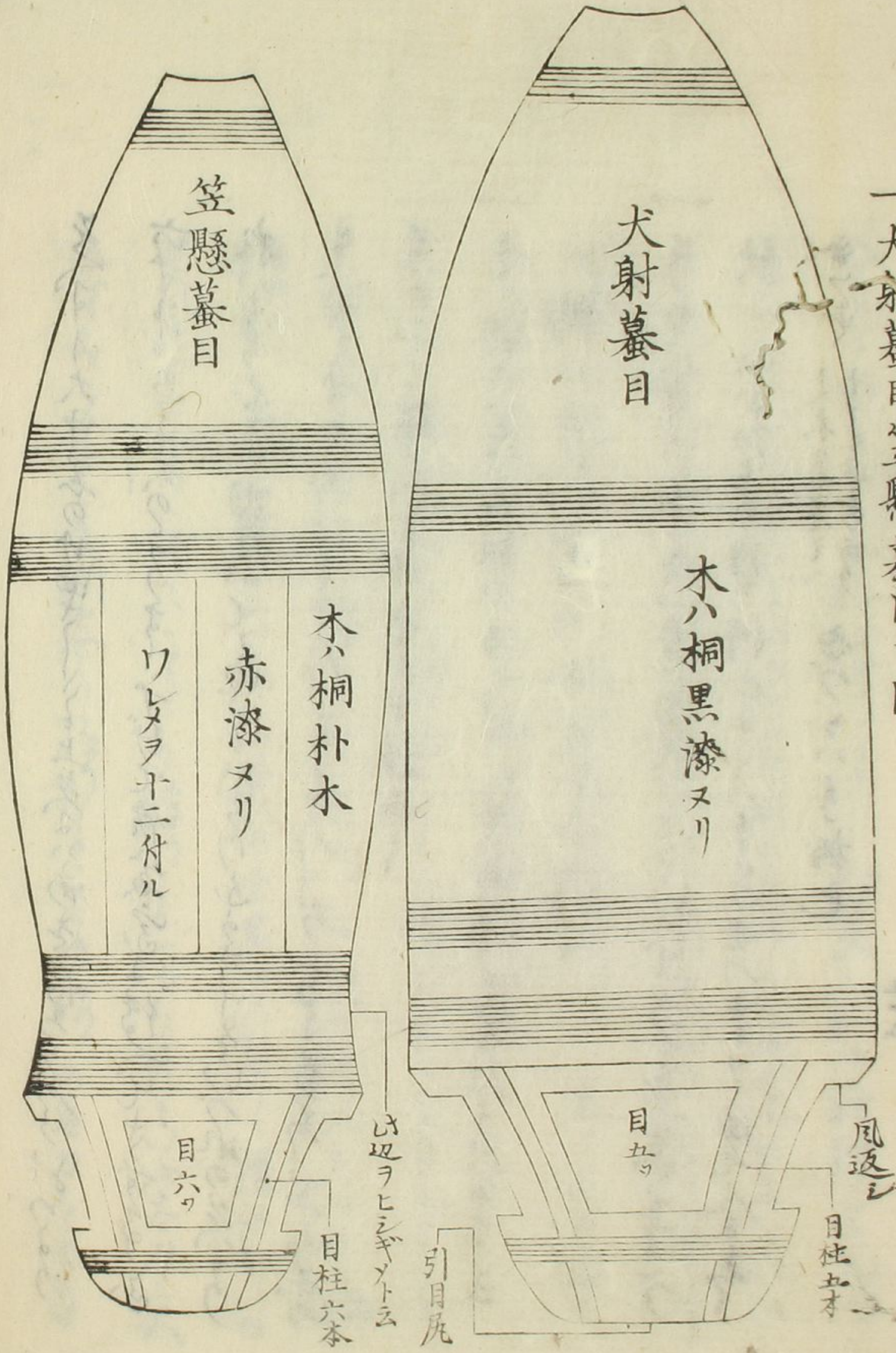
一 ちぢむ此羽にちぢふの羽とまぢの蜂とまぢの合とまぢ  
ふはと云ふはうの蜂を好む名なまぢの義経記巻の五忠  
吉野山合我々云 忠信はまぢの志げの人の志業はひかすく禮前の  
甲此銃をくめたるいこすより傳りたるづら井とくた刀三天  
五すまらるをもき判友より強りたるは作りの名刀をもき

そす大中原の甘四しの上まはあをほろろがうれのより  
六す斗ある大ダイのころまじすげて佐友家よ傳りしすするうふ  
ねはまぢまぢの羽をいれまじもひりあまじもきづれの名より  
一 すとすすをいしすたりたるをめらう言は負ありあまの  
すのわこ難いよげをも持て

一 さく羽といたつ此羽のるく射礼覺悟記に見ゆたつ此をいふ  
ハ 鶴トビのるくはまぢのわすハ紅鶴と  
一 弓のにぎり草をい古ハゆだうとまぢのひる万葉集巻の七ノ  
秋のぬかめちの月を河山よこりまぢのゆつりまぢの海人なまぢ

大和集巻二  
十まけあり  
あづうハ弓柄也  
雑記十  
五十二

一 犬射墓目笠懸墓目之図



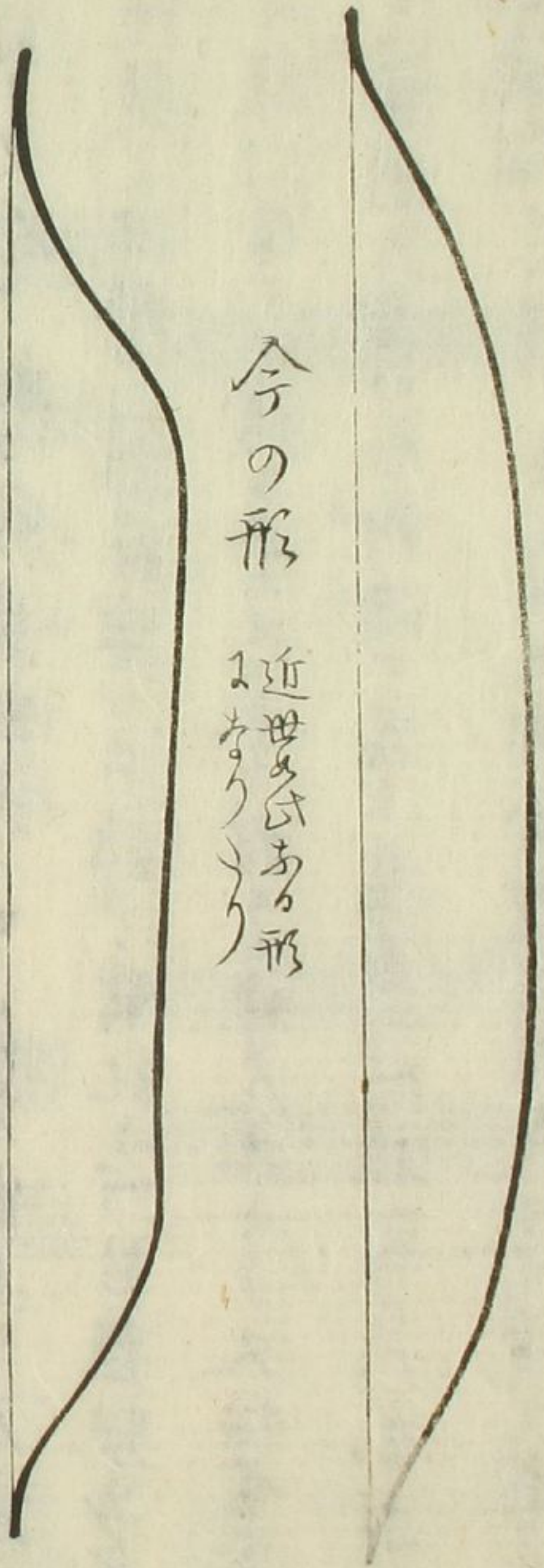
光大曰犬射墓目笠懸引目之圖至て縮圖よりわろかき  
 方へ調度模圖を以右方の圖を補全其のときこの大サ  
 普通通の弓の強弱よりして大小ありし

一 引目より人を射るもの東鑑卷之四に後友射兵衛尉基清  
 が横後と伊勢三郎能盛が下部と關北の町能盛馳出く  
 竹の根引目より強り糸の区又を射るゆえなり又同書卷  
 之十に頼朝上洛のる所渡の宿は逗留の町旅宿の門前並礼  
 の者下馬せざりしを和田太郎義盛引目を以て追て射るゆ  
 則ち馬よりゆえなり疵を射しして生捕りしなり

一 弓の形古今を考ふるに左の如し

古の形 京都將軍の時代  
さへはばある形し

今の形 近世もはある形  
はななりなり



真丈按今の弓ハ付糸はよくぬりをもろぬくとい  
やまー古の形のことへあれはくちくちくし

一 犬追おの弓のにぎうりま流武田流射所秘傳書より抄すの弓の

扱の中をあげずひくと考えて考へる しつと勝射の  
弓ははずへ

スゲ  
スガ  
薛管右二種  
同物ニ非ス

一 弓はまぎりを古ハ薛スゲとて考ふるもり何り薛とて考ふるも草  
まて考へるもりも子の内心すうりきあり現存の帖よきげ  
西三位知家チカの歌よきものよのゆばうりまやまの三浦まげんし  
中へあはるうりけぬつれあき ゆばうりハ弓柄をえ弓のたまるうり  
三浦ハ薛の名前あり

一 夷あひま弓と云ふあり 貞應三年二月廿九日案云云本年冬

比高カウライ飛人乗船流寄于越後國寺泊浦仍今日式教大夫  
朝時執進其弓箭以下具足於若君御方則覽之奥州

以下群糸弓二張 假令如常但頗短  
似夷弓以皮為弦と何り又参考太平記直

上流云足利直冬ハ大内舊跡大極殿の額門の跡みみみ皮

布にて穿し縫ふは襪弓征えをも就候は持せしも戎才の意草  
 履モリス巻は取弓持て草鞋サシタビは長単皮を巻ハカせしあり古夷弓  
 詳あらず按てはもと想て日本の外の國こそ夷といふは唐の  
 弓を夷弓と云あるは古日本にも唐の弓は短き物ありは未だも  
 弓と云あはしくも成へは唐の弓は短き物ありは未だも  
 似夷弓と書し来へ音義ハ唐ハ別ノ國  
ナリ今ハ朝鮮ノ内ニ  
 竹タケ履エビラも古き物也昔我邦語又志く矢ヤーと竹履といへり  
 毛拂弓の弓祝儀の類は志く矢ヤーと竹履といへり  
 糸果表の弓と云は是も軍弓也弓の竹の上皮をこしけて細と  
 き針をどのかきこの麻のより糸をこすもすうもすうも本とぞと

是き角あり巻つめり糸のやはら麦漆を付てまぐ麦漆ハ  
能くはこむの粉  
を能く交るし 想神を右のめく巻て糸の上をせしめり  
 又てさつとぬり能くししうれり耐麻のきれあざまぬぐひん  
 つやをぬきてまよ上をよりのつりりもて思くぬり能くしし  
 後履を巻くは履ハ糸脚布脚ウラスモトハズせんめん巻のぬる履日臨巻  
 月臨巻ありせんめん巻ハ十文字子履を巻かぬるを云ひぬる履ハせん  
めん巻の上の字ハ横ハ一文字子履を巻くぬるを云日臨巻  
せんめん巻の下の横ハ一文字子履を巻くぬるを云日臨巻の字ハ  
月臨巻と云名の聲ハ併く月臨巻の次せんめん巻を次ぬら  
履ハ履の字ハ糸脚ハ  
也ハ糸脚ハ能く巻く 履せり此履引目くまきの履を引巻りハ  
まきりハ上の履ハ引目  
くまきの履ハ下の履 以外のけあり履ハ履不も心すうをぬへし  
 五不も七不も巻へけあり履ハ上の履せんめん巻目せん巻  
月せん巻せん巻の履引目くまきの履の外

の夜を長くけり  
何れも夜の中は、  
手突来と云おあり  
は扱て扱げづき  
と云おのぬく  
突くと云く  
の堅者  
の澄を  
は扱て  
竹を  
中心を  
ナクゴ

新日巻は巻を世六  
扱ず是ハ手衝  
多々ハ先年  
と云く妙観院  
夫一口道  
出で樽  
は立りり  
裏表  
て二言  
因幡





夫木抄卷二十は六帖頭光俊朝臣の秀弓の巻も及び山中はちひあひひしひこひめり

一 大切の弓がどヒヤクキウノリのあきりををきくは白菰の糊を紫蘭云草ノ根也つふへー白菰の粉を水とぬりつふへー出せざるを望む白菰は能くぬる物之薬店を求むべし  
ける器具ノ類ニモシルス

一 弓杖は的場馬場木の間をおる弓多敷云云に依りて外作を下へおる物之薬店を求むべし

一 弓杖は的場馬場木の間をおる弓多敷云云に依りて外作を下へおる物之薬店を求むべし

一 弓杖は的場馬場木の間をおる弓多敷云云に依りて外作を下へおる物之薬店を求むべし

一 弓杖は的場馬場木の間をおる弓多敷云云に依りて外作を下へおる物之薬店を求むべし

一 弓杖は的場馬場木の間をおる弓多敷云云に依りて外作を下へおる物之薬店を求むべし

弓は可なり弓ハ畧義之又云云りる弓は可なり右の弓はひつきて弦を下へおる丸の手を弓は深て例或は少へーお時ハ外竹上へありてまろー弓は可なり外竹ハ上へありて又笠懸之記云云は法一弓は可なり外竹ハ上へありて又小笠系長考記云弓杖を可なり馬場末へおへー十交おへハ腕をさへておへー

一 公方様宝町の弓袋の多法家北畠の用妙北畠云公方様軍陣の涉弓袋ハ重織物カサヲサリモきりり丸を二不し付之丸ハ白地ハ赤一きりりハ白赤をハむしきりり丸を二不し付之丸ハ白地ハ赤一扱を重ぬへー公方様考はハ弓袋ハ持せらるり丸を二不し付之丸ハ白地ハ赤一

阿軍陳の肘ハ其ノ犬の肘ハあうく無紋也 ま織物ハ二三重織物の  
るく織物の上は織紋

をせりをも之を白糸をハむらさきもえきことハ相の染也

白糸にて織ひは紫は黄糸にて色とりを云

一 雁股の多層の股ハ似る多層の<sup>カリマタ</sup>カハ<sup>カ</sup>ハ<sup>百重</sup>こといふ

るく<sup>カ</sup>を中<sup>カ</sup>へ<sup>カ</sup>と云くも<sup>カ</sup>び<sup>カ</sup>と云くも<sup>カ</sup>ありとありとあり

らりるれろ カヘルマタ 実ハ蛙股と書へきるあれと初まりなりと云

ゆへに<sup>ヒギン</sup>初まり付て層の字を假り<sup>ヒギン</sup>ひひ<sup>ヒギン</sup>とたとハ<sup>ヒギン</sup>細き目

と書へきをひきめと云初まり付て引目曇目挽目<sup>ヒギン</sup>あり<sup>ヒギン</sup>書く目

例として和語の畧符を

文字ヲ書くハハハハ

多ク文字ハあつむるなるれ



カヘル中畧ニテカルカハ  
時ニテカリトナルナリ

一 上<sup>カ</sup>の矢と云ハ<sup>カ</sup>腹ハ<sup>カ</sup>かり<sup>カ</sup>を<sup>カ</sup>上<sup>カ</sup>を<sup>カ</sup>上<sup>カ</sup>と云ハ

後<sup>カ</sup>の正面の上<sup>カ</sup>を<sup>カ</sup>せを<sup>カ</sup>征<sup>カ</sup>を<sup>カ</sup>ゆ<sup>カ</sup>好<sup>カ</sup>あり<sup>カ</sup>と<sup>カ</sup>あり<sup>カ</sup>た<sup>カ</sup>の

畧<sup>カ</sup>は<sup>カ</sup>あり<sup>カ</sup>え<sup>カ</sup>なり<sup>カ</sup>畧<sup>カ</sup>ハ<sup>カ</sup>記<sup>カ</sup>

一 中<sup>ナカ</sup>と云ハ<sup>ナカ</sup>と云ハ<sup>ナカ</sup>を<sup>ナカ</sup>くり<sup>ナカ</sup>す<sup>ナカ</sup>この<sup>ナカ</sup>次<sup>ナカ</sup>を<sup>ナカ</sup>す<sup>ナカ</sup>と<sup>ナカ</sup>上<sup>ナカ</sup>の<sup>ナカ</sup>く<sup>ナカ</sup>

の<sup>ナカ</sup>次<sup>ナカ</sup>を<sup>ナカ</sup>す<sup>ナカ</sup>ゆ<sup>ナカ</sup>中<sup>ナカ</sup>と<sup>ナカ</sup>と<sup>ナカ</sup>の<sup>ナカ</sup>く<sup>ナカ</sup>と<sup>ナカ</sup>なり<sup>ナカ</sup>久<sup>ナカ</sup>ハ<sup>ナカ</sup>羽<sup>ナカ</sup>の<sup>ナカ</sup>ま<sup>ナカ</sup>り<sup>ナカ</sup>

羽<sup>ナカ</sup>ハ<sup>ナカ</sup>山<sup>ナカ</sup>の<sup>ナカ</sup>尾<sup>ナカ</sup>と<sup>ナカ</sup>云<sup>ナカ</sup>一<sup>ナカ</sup>の<sup>ナカ</sup>お<sup>ナカ</sup>と<sup>ナカ</sup>い<sup>ナカ</sup>む<sup>ナカ</sup>ま<sup>ナカ</sup>外<sup>ナカ</sup>む<sup>ナカ</sup>ま<sup>ナカ</sup>

兼<sup>ナカ</sup>細<sup>ナカ</sup>を<sup>ナカ</sup>忠<sup>ナカ</sup>の<sup>ナカ</sup>書<sup>ナカ</sup>ハ<sup>ナカ</sup>あり<sup>ナカ</sup>義<sup>ナカ</sup>經<sup>ナカ</sup>記<sup>ナカ</sup> 忠信者時  
合戦ノ多ク 云<sup>ナカ</sup>大<sup>ナカ</sup>中<sup>ナカ</sup>美<sup>ナカ</sup>の<sup>ナカ</sup>母<sup>ナカ</sup>四

き<sup>ナカ</sup>と<sup>ナカ</sup>上<sup>ナカ</sup>の<sup>ナカ</sup>あ<sup>ナカ</sup>織<sup>ナカ</sup>わ<sup>ナカ</sup>る<sup>ナカ</sup>ふ<sup>ナカ</sup>く<sup>ナカ</sup>此<sup>ナカ</sup>め<sup>ナカ</sup>より<sup>ナカ</sup>下<sup>ナカ</sup>六<sup>ナカ</sup>寸<sup>ナカ</sup>斗<sup>ナカ</sup>何<sup>ナカ</sup>と<sup>ナカ</sup>

大<sup>ナカ</sup>の<sup>ナカ</sup>か<sup>ナカ</sup>り<sup>ナカ</sup>す<sup>ナカ</sup>げ<sup>ナカ</sup>く<sup>ナカ</sup>佐<sup>ナカ</sup>最<sup>ナカ</sup>の<sup>ナカ</sup>お<sup>ナカ</sup>ハ<sup>ナカ</sup>傳<sup>ナカ</sup>へ<sup>ナカ</sup>て<sup>ナカ</sup>さ<sup>ナカ</sup>す<sup>ナカ</sup>年<sup>ナカ</sup>の<sup>ナカ</sup>あ<sup>ナカ</sup>れ<sup>ナカ</sup>は<sup>ナカ</sup>さ<sup>ナカ</sup>ら<sup>ナカ</sup>は<sup>ナカ</sup>

の<sup>ナカ</sup>羽<sup>ナカ</sup>を<sup>ナカ</sup>い<sup>ナカ</sup>そ<sup>ナカ</sup>と<sup>ナカ</sup>い<sup>ナカ</sup>づ<sup>ナカ</sup>る<sup>ナカ</sup>ひ<sup>ナカ</sup>と<sup>ナカ</sup>り<sup>ナカ</sup>あ<sup>ナカ</sup>ら<sup>ナカ</sup>う<sup>ナカ</sup>く<sup>ナカ</sup>を<sup>ナカ</sup>い<sup>ナカ</sup>つ<sup>ナカ</sup>れ<sup>ナカ</sup>の<sup>ナカ</sup>久<sup>ナカ</sup>より<sup>ナカ</sup>も<sup>ナカ</sup>一<sup>ナカ</sup>寸

永正家中竹馬  
記云上さーと云  
征矢ハカハら及  
そくそくさくさく  
さくさくさくさく

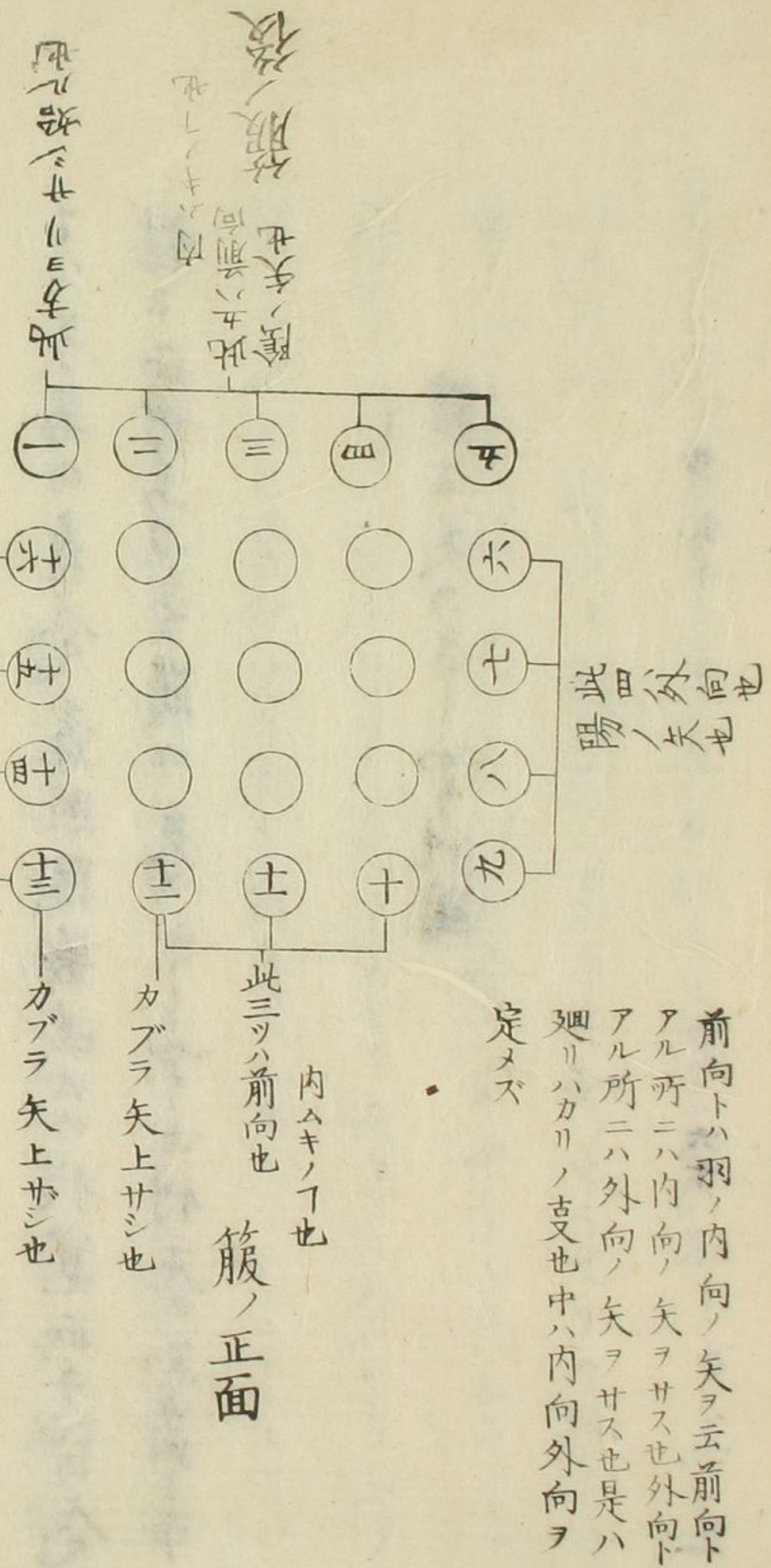
躰ノ矢ト云フハ  
上サシ中サシナ  
トハハ別ノ事  
ナリ下ニ記ス

まずをせしめてさしつりたるをかいらるまおひあーま今の世  
 の人中ざいハさうり矢さきとひるをたむせしつり根をま  
 半とともひ体の矢のさきともまひ又中さしと六上さしよ  
 對するものて征矢のさきとさう何れもあやかりあり  
 用へう以忠の義経記の文を能考へるへしもちまことハ  
 ちちん備とそ蜂を食むら備らりのるえ矢の母は鷹の羽  
 と云ハん備らりの羽のさきと高忠のさきとをさハ鷹の羽  
 小羽ハ山鳥の引尾を付ありとええらり義経記の中さし  
 ちちまみの羽とてまひじるとちま合ひらりとり矢ハ一子の  
 羽のさきとえいれと佐藤の家とてあり中さしとさきとのさき

傳ありへし  
中さしとまハとて  
 の矢のさ中まさすハ非ス

一 箴は征矢 ツヤ 上さし中さしツヤのさしやう繪巻花のめしツヤこさき  
 多賀豊後守高忠の傳へ高忠の記さしれし持朝記は  
 見えらり多賀守忠ハ小笠原民部少輔持清後ハ備の門才  
 まて弓馬の達人へ慈照院義政の代寛正の比の念  
 誦は正傳ありは箴の矢のさしやうの傳花のさきへ

箴は矢のさしやう地圖



弓法私書ニ廿五矢ノ時ナラデハ  
 上ガシラサズト見エタリ  
 上ガシサ、又時ハ中ガシモサスヘカラス

弓は巻く藤ハ正字ハ藤ノ字也竹冠は書ク竹冠して藤と

書クハあぢと云字ニカガハ弓は書クおまあす藤竹カムと云

おハ料藤とも云之東西洋考と云書ク云料藤蔓抽被地

無枝葉有皮裏其外如竹皮剥之則落長數丈不值剪

伐可繞數國○齊民要術と云書ク云料藤圍數寸重

於竹可以代篋以縛船及以爲席勝竹○字彙ニ云藤蔓

生似竹○右の文の意ハ料藤と云おハ蔓出た地の上はけひ

ぶささる枝葉もあ皮をぐるて竹の如く皮を剥けも

よくさられると云ささる丈もあらうからすておけを何

ねるもあらうて敷くを繞るなどもささるの如き

裨ヲ卷ト云ラ  
カハサクヲ皮  
ヲ卷ク事トス  
ルハ非也

ますまはりの内外をどあり竹よりも重寶之竹の幅の代りも  
あり又松をつまゝ繩もあり又細くても序の織るもはし  
とく弓は巻くハ右の料藤の皮を巻く細くても巻く古  
書は真樺<sup>マカバ</sup>を巻くと云ハ藤を巻くも巻く樺を巻くと  
云事前記は藤を巻くも巻く真樺を巻くと云ハ此を巻く  
糸を巻くも巻く樺を巻くも巻く糸を巻く糸は給をぬみ  
真樺と云へば此の樺と云心也

一  
う法不は糸を巻くも夏秋はう海を巻くも巻く春冬は底  
を巻くも巻く糸を巻くも巻く糸を巻く糸は給をぬみ  
といふは法書は息えて生子細をハ記する者人少本間流

の圖書より法不は糸を巻くも巻く春冬は底  
を巻くも巻く糸を巻くも巻く糸を巻く糸は給をぬみ  
といふは法書は息えて生子細をハ記する者人少本間流  
を巻くも巻く糸を巻くも巻く糸を巻く糸は給をぬみ  
を巻くも巻く糸を巻くも巻く糸を巻く糸は給をぬみ

一  
弓の弦ハ麻<sup>アサオ</sup>草を水は少の間ひく頓<sup>ヤカ</sup>て糸は短<sup>サラ</sup>きは半<sup>サラ</sup>は付



一 弦の上せき中せきりせきと云るを若ハせきと云と云ん  
つらりとひくへ細川高國の小的外題は小的之書才トアリ 弦下乃  
法よりよりきれと云るの何ぞ

一 小笠原光清より記岡本美濃守縁侍の記を引も古化  
了弦さひてと云事有り 今世つれきぬと云物も弦端を  
巻く縮の事と云いごとと云ハ割出と書て縮ツヤの裁を  
つせのいきれの事古板の事用をある割出の二字を出して  
サイドと訓を付しう後撰和歌集卷七秋の節のりよ云  
あきちつらと云事つれとを女のわらふつらと云源のと  
はか「美」る後ハぬりやう神と秋の節と云るは

まじり清少納言枕草子に云ききりつらと云るは物つれた。

あかひむいふあまひのてうど調皮 蒲萄染割出

のをうへてと云るのあらは有りたりを見つげらるる

一 躰ダイの矢と云るを近世ダイの雜説を作り出して人を惑  
はする有りやうを筋は梯形ありくしうを矢らうと云ふ  
矢の根をバムと云るはさうと云ふこと也田舎人ありハおきげと云 古製の筋はち  
梯形のあきい版ありそれハ矢の根をあらは有りうその底  
板はさき付筋の矢をこへ向かの方は矢一筋をを  
筋の矢と云向めは草結のつ不ありそのつ不は筋の矢を  
まてこへ筋の矢は穂の矢をこへみ付て穂の矢の節は

あり故神の矢と云掃形ある腋はハ神の矢と引目と不  
及故神の矢と云掃形あり

一 カガケヒキノ 笠懸引目のひきぎ目の射御持長記は云笠懸引目

のありより古形を考むる五形をいふと云り色赤うり根か

ハひき目あり実朝の御代より今の笠懸引目ハ定本あり

笠懸引目のひきぎ目のひきぎめハ實朝のにぎりむ

ぎあむり始むりこれよりしてひきぎめ始むりかこりあむ

とひきぎめをまゝに上置抄云引目をこりひきぎと云り

新しき引目をあむりひきぎと云れめのあむりが考むる

昔よりひきぎと射りて笠懸引目の 礼志 云笠懸引目の

ひきぎめハ中程のさうをより下を十二ひきぎと定本をある

あむり不あり定本ありあむき程又定本を中らむ

たむりて笠懸引目をひきぎ大竹をひきぎあむりあむり

程よりしてむりすむり

○笠懸引目

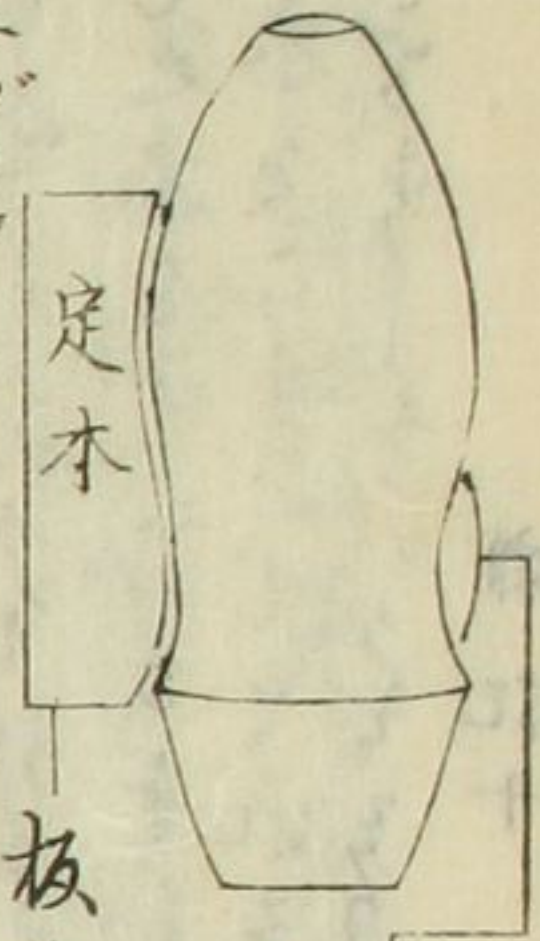


け懸引目れめを付くを志の考  
たむりひきぎめと云り定本あり  
うをりまれれめを付くを  
ひきぎめと云いけまをりあり

阿むりはあむりひらやむりあむりひきぎめをり  
ひきぎめはあむりあり上の方をりて懸引目れめ出本あり  
形ハ実朝のさうひきぎめあり形ありけむりありあり  
ひきぎめをりありありありありありありありありありあり  
いそむりれめを付く大射引目ハむりれれれれれれれれれれ  
○定本を中らむりあむり引目のさうありひきぎめありありあり  
木をりてありありありありありありありありありありあり  
ありありありありありありありありありありありありあり



のせゑとハ引  
目のそゝる算  
をきつむ木の  
坑を云



ひきめの本意はけらびれゝゝをひきめあり  
十二の豊はぐらにれめとれめより音をわす  
がわゆるきとをきかへりて古にあり

ユブクロ  
「牙袋」云々ハ引目袋を指し役人の名に役名の形は記ス

「墓目の大小ハ射子の弓の強弱より多しあれハ定かす法あり

弓強れば大ありを射ゆる弱れば小ありを射ゆる射て試て大

小を定の用へハ豊の長サと横の長サの恰好つりあひの事

古書はそ妙法あり一依之真丈より合恰好を考へたり

記に云く豊の長サハ墓目豊の長サ五寸ありハ横の長サハ六寸

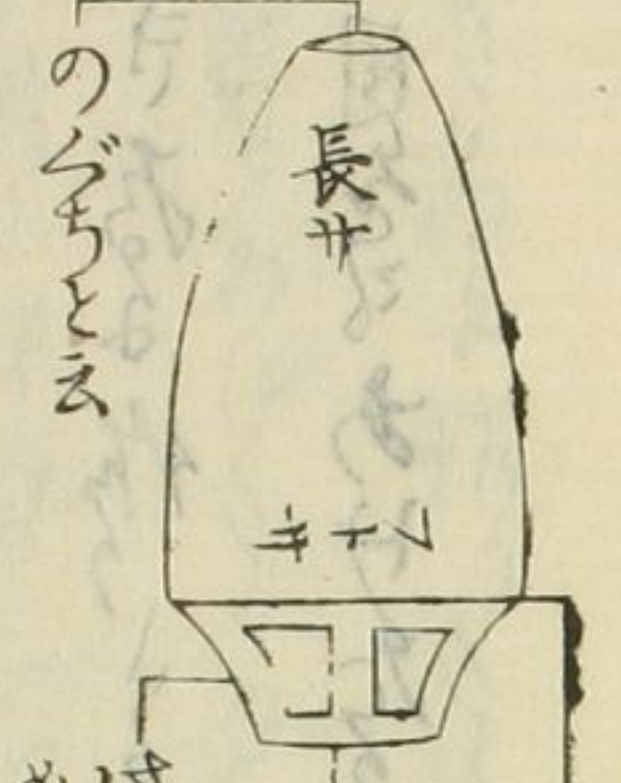
まゝあり目よりハ豊の長サハ又豊の長サハ八寸ありハ横の長サハ

ハ九寸ありハ皆是は准一知一ハ豊の長サハ墓目の長サハ

の長サハ引目の長サを

木ハ朴木

又ハ桐也



ひきめの長サハ引目の長サハ長サを  
四ハおてそつりかの長サハ  
まじりまじりまじり上の長サ  
すその長サハ豊の長サを四ハ  
おてそつりかの長サハ

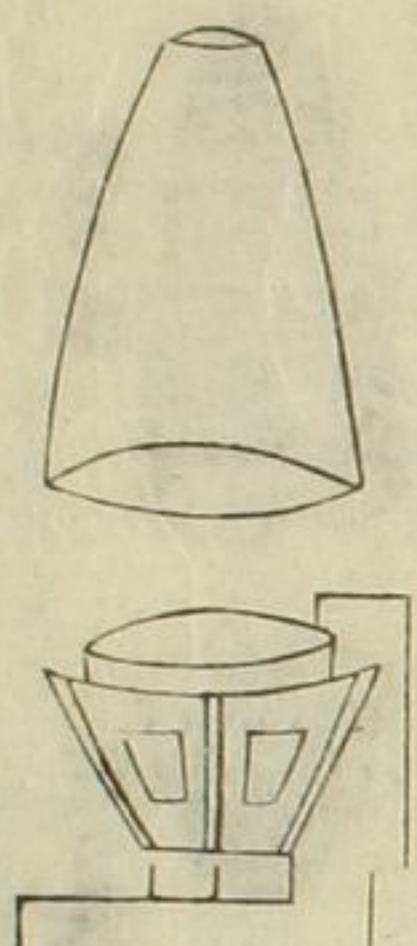
ひきめの長サハ引目の長サハ長サを  
の寸をむらおてそつりかの長サハ

古代ハ墓目より云職

人あり墓目より云職

豊より云職

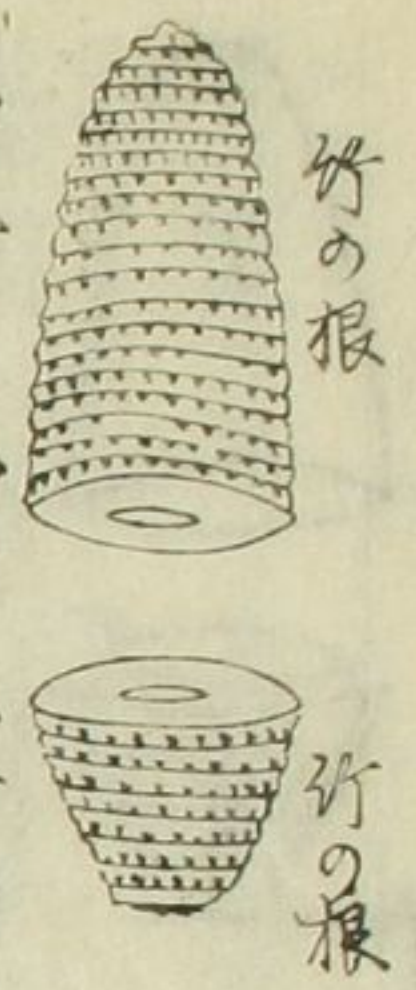
よりハ引目の長サハ長サを



ひきめハ引目の長サハ長サを  
ひきめハ引目の長サハ長サを  
ひきめハ引目の長サハ長サを

めがらハ引目ハ長サハ長サを

一 竹の根基目ハみき竹の根のさきの丸く、いもぐらゝの如くあり、  
 一 兩をたて作りて根をうすし、根基目一ツ作りて



合せやうおのごとく中をうめへし  
 外もけぐるべし根をうすしを合せし

尾ハ外をけつぬ肘の形中をうめハあまの肘よりさす  
 かれて後はまきしよりさす竹の根引目は目根入より及

一 墓目をうすし木をうすくうすたうハ竹の音ひびきありてよし  
 されども竹の根の中をさすは竹の音ひびきありてよし  
 竹の音ひびきありてよし竹の音ひびきありてよし  
 鳴らすべきなる作りしものあらず竹の音ひびきありてよし  
 竹の音ひびきありてよし竹の音ひびきありてよし

射倒すべきなる作りしものあらず竹の音ひびきありてよし  
 あらず目をあげしものあらず竹の音ひびきありてよし  
 こゝろ東鑑の伴勢之竹能盛る竹の根引目を以て  
 射ししものあり又和田左所義盛のそれの志を引目を以  
 て馬より射ししものあり又た親衛引目を以て能く  
 射ししものあり又た東鑑の見えしものあり又た  
 竹の音ひびきありてよし竹の音ひびきありてよし  
 やうに作りしものあり竹の音ひびきありてよし  
 竹の音ひびきありてよし竹の音ひびきありてよし  
 の音ひびきありてよし竹の音ひびきありてよし

一 薑目ハ元来魔生の物を退るるは極出の物也久  
 其あまうし鳴り言あり物あるが狐狸おとす耐をあび  
 やのする何りそ鳴り言は怒りあもるししはけおのる  
 とて作り出の物ある事しそも急ハ前よりいごと  
 一 ちく篋の多職人盡歎合矣細工の繪の詞よこれいち篋  
 とそあつしはれてはき中巻集新字云うきとほひを  
 きらふおあれがほまは依るあり古よりうきとほひの名物と云  
 佐渡篋也又信州久々の一うほと云を用るされたり  
 うきとほひ徳多き或矢匠ノ云ウキスト云ハ篋輕クシテ水ニ入ハ浮  
 ク故ウキスト云ウキスハ佐渡ヨリ出ル今ハ出サ  
 不知久ト云ハ信濃國ノ地ノ名也知久ト云所アリ昔信州ハ小笠原殿ノ  
 領地也シユハ知久ノ篋ヲ用テシナリ一カト云ハ二年ハタルニ録ニテ

一 刈ニ切ラル也三年ハタル一刈ニ切ラズ十タニテ切ル也一録ニテ刈リ取ラ  
 ルヲ一録トテ用ル也是ヲ鎌篋トモ云フ也 鎌ニテ刈ラル故ナリ  
 ○貞丈云ウキストハ水ニ浮ク故ウキスト云トハ非也堅キ篋ニテモ水  
 ニ浮クモノ也沈ム事ハナキナリウキスト云ハ竹ノ肉シマラス浮キタルヲ  
 云也堅キ篋ハ肉シマリテ堅シウキスハ肉シマラス浮キタルヲ  
 ニウク事ニハアラス何ノ篋ニテモ水ニウク也信州諏訪ノ人ノ云ク信州  
 ハスヘテ竹ノ性悪シ太キ竹ナドハナシト云按スルニ寒國ナルユニ土地竹ニ  
 相應セサルユニ竹ノ肉實セズシテウキスニナル也  
 竹林派の書云篋竹ハ二年竹をうきと云三年を強篋ソコノ  
 と云二年またうきを強うきすと云といふもさういふあり  
 乃於近年の冬竹の結光怪し居るは遠より竹  
 ハ五月生して其六月迄して月數ハ一年より二年竹あり  
 今年年の五月生しし竹を来八月切らるを竹うきすと  
 云今年年の五月生しし竹を三年めの八月切らるを強

うきすずと云今年の五月生きたる竹を四年目の八月切  
 ころを三年竹の強筵と云年々しき竹なりおのゝ志を  
 切て一年は一錢目法のおのゝ志をまじへてこの日記あり  
 一 久のせけ糸を射つけの音と云るの的久はかきしりて  
 常の久よりいへるは 弓秘傳書  
 一 村重殿の弓弓秘傳書 武田信玄書 小笠原清元記 云村重殿と云八段を  
 むろくとちりしてつらひるを云く是ハ重殿の根本なる  
 而廿八世六合へハ六十四のつらひは巻より生余の  
 うへすべしむろ重殿と云く是れも中はう村重  
 孫のまわりを定ても是れは 弓秘傳書 といふ

一 サシエヒラ 善い箠弓法秘書と云箠はさうのう箠さ箠かり箠と  
 云ありさうのう箠本と云見えたりさへ元はうと云ハ板  
 とい管はめくさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう  
 まちやうめんをさうさうさう  
 一 カリエヒラ 華箠射抄拾遺抄と云志と華志ひうさう六略儀と云  
 公方杯抄成法書と云箠は志ひう略儀ありさうのうさう  
 ら本ありかゝ箠と云ハあめいさうつさうさうさうさうさう  
 箠と云ハ井猪の皮をかきと云見えたり華箠といハ箠  
 の方志をあめい皮をさうつさうさうさう  
 一 だう布のより弓の弦をさうさうさうさうさうさうさうさう

さうわうと云くは徳書常用抄な云たうわうの巻は四寸ありと云えり

一 コイシカシラ 碁石頭のより本間流聞書云角鷹の羽をハ先子

白くわうと云えりハ一是をひもや花と云く又白くをちと云えり羽どりたるをハ碁石と云く又らうをのこして羽どりたるを ハイカシラ 蠅頭と云く

一 慶長八年 三ッ股四ッ股やうけのより細川吉首馬聞書 祀サレタル

云ゆらけを四ッけのより射たり射の智南流あり又

三ッゆらけのより 小笠原流ニシルノサト云 以存初あはゆらけやけやけと云ゆ 吉首ノ

ニツカケ四ツカケノ称アリシニホウ堅クナリハ差矢殆りテ後ノ一也

ニツカケ皮巻フスベウ  
ツミ水巻紐紫丈  
高指クシ指ヲ紫皮  
ニツカケ也故ハ不付軍  
陣巻フスベ紐指紫家  
ノ紋ヲ付ル器我ハクロ  
革コウシ皮フスハ草無  
故也ヒモ友皮也無故  
也

トハ無地也指モ友  
皮也器ヲヒモ指ツ  
グニ用ルト云ハ不浄  
ヲツカシニ爲ニ用ルト  
也

又巻目一寸斗リ  
異テ又五分斗オ  
イテ一寸巻テ其上  
ニ藤ヲ巻也

一 せんだん巻せんだ巻二あるせんだん巻六ある記はぬく

志げあろの本管うろ管のりな敷をわろく十文ある  
まゝせんだん巻と云くせんだ巻といふ志げあろの下地を  
巻討のりこ下地麻糸を漆をかへつけ巻目二分志げく

巻又一分おきと又二分巻目付候くまき候上巻を  
うろくまをぬく相敷をだんぐは巻目の上は巻を熱上を  
ろうらよぬく上中矢守り後三本は白敷をつらぬ

一 せんだ巻のり云ハ千手巻之下地ようろくまを付く麻糸は  
て巻目を五分志げく巻又五分巻目又五分巻目たんに  
此麻糸を巻せしめり新しき塗らぬてよをらう

きよぬもど相上下矢指為三和向をいつう想辨八友を  
奏ず是をせんだ奏のちと云く

一 そば馬のちと云ハ永正家中竹馬記云とを黒のち竹を  
ぬぐ皮を墨にき竹をハぬぐすくそば木げうり

馬くぬぐ 上下矢スリ三和ニ  
白髪ヲツカウナリ

一 フタヘアカウレシ 二重赤漆のちと云ハ同書云又こき赤うり木を

背赤うり木をうすき赤うり木をぬぐく  
こき赤うり木をぬぐく木をうすき赤うり木をぬぐく  
矢はうりぬぐく皮をぬぐく白漆をうりぬぐく  
漆は何もすせぬぬぐく

一 赤ゆうせんうけきりうがのち同書云室穂は何皮を

てぬぐく但犬の皮ぬぐの皮ぬぐハかけぬ又京都にて  
コヒヤウ 播磨の皮ハ人々依て料砂きく一室穂ある也又  
ぬぐせんをぬぐく意照院殿代菊中一依武具  
帯して赤ゆうせんうりぬぐく時小笠原備前 大中 赤手毛  
せんをぬぐくうりぬぐく十六矢をぬぐくぬぐくうけてうけ  
ぬぐく小笠原播州元長物語ありと云毛皮を用ひぬぐ  
て赤ゆうせんをぬぐくぬぐく赤ゆうせんハ紺らぬぐくぬぐく  
このゆうせんのちぬぐく赤ゆうせんの鞆履ハ免  
ぬぐくハ月ハぬぐくぬぐく室穂ぬぐく

一 かつぎのやまは飾の二用として式の例はあり  
いかにあるか

一 室穂の乞をさうかしてさるるを是ハ一股をあらはせハ  
ぬのれさるる物故そのりて才家の方きよは筋遣は指し  
ぬくもあまかきまをさしてさる

一 板弦サカヅルのり方礼儀は次云々この弦のり方これ若のさ  
したる本陣モトハバさう作り細くいまし本陣カラハバをバツク  
すしてさるるあつとさこの弦といひはらのつらさる

はらの八松板に職人歌合は松板中りつと云詞あり店考  
のあまあり○布施弦と云ハ布勢の海越中國村水郡日

或云坂弦ハ京  
八坂より出るを  
云とあれども伊  
勢の松板の板  
を用へ

何り多胡海とも云ハ所之名産也○關弦と云ハ伊勢國  
吳といふ所の名産也

一 弦を伝はり日墨ヒキ字家と云八十歳余室永ハ比の老人の  
説は夢を継ヌヒソク夢のぬくうみそかせのぬくは登りあま  
つけまをうけて米俵をつらこきたるが能とあ悟

一 矢間マヒラキの羽ヒコリシトハ鴨キチガキ木胤ムサビ墨胤ムサビしひえとりとハ  
ひまきとあつといちやうもいもねすみといますの尾の

細きしむさびといのがすまのりて村御持長記云

むきひいさげくくとをハ誤く

一 鶉目梅之事 東鑑建久元年九月十八日條 侯野矢即覺

之無文 深羽以鶉目梅 接之藤口卷也 又蜷川親元

の記を羽取と云書るより羽の梅もさうか  
又上矢つらめののくんむしもくまき 眞梅は對して梅

のあまははもくまきをうらめのめばと云く  
コカシノ

一 焦篁の事 小笠原引目のつらよ月ゆもこ 篁を不純こつ

うたふあふも射湯拾遺抄云こつうのをも引ぬこつ  
ゆらけのめくまき射と方聞書云わらひこつうのめくまき

わら篁をわらけはるけり火をわらけこつうをさき

フシぐノ上ノ所バカリ火ニテフシカゲ

如クコガシテ外ハ白クシテ置也

一 さき篁の事 新元は流せしはかり 誤ありきこ 篁思流

まそつをあくさつとさき篁めりこつうけをさき射を

思ひもまそつ也ありやうまこめを云あり上賢抄

云一子神流の糸篁いさき篁あり ウルシニテサツト 又のこひ

篁 赤ウルシニテノこヒ 赤もすりこまき 的出張記云 的久の糸節

ふけ塗るよりわらし  
的矢本式ハ白篁ニニテ  
フシカケトリタルヲ云

云く是ウルシニテサツトスリト 本間流聞書云わらわの糸ふ

テコクフシカゲヲトルヲ云 此サハシト云意モウルシヌリテ次第く

しの下塗さるる也 此ハシト云意モウルシヌリテ次第く  
ニウスクサツトナリタルヲサシテサハシ  
トハ云ヘル 次来くま白ひ何るやうまこめりこつを云  
ナルヘシ



永仁布衣始記云篋思塗サハシ云々此文を以て思塗  
トサハシトぬりやうニ多きあるを考へ

一 さいび篋と云ハサシ云々篋の事ニサシ云々篋ハ拭篋ノゴヒト云

サハシノハシヲ反切バヒトナル云  
依之サハシノヲサビトモ云 第の上を

漆もも落くぬる者さいびとせたる心あり

一 筋をさす夫の教の事保元物語は淡西八郎の朝の事

をうきくゝる案云云久い手はきぬれぬびきをいひて

るよりよあぶ矢一ツもぬぶうたり中畧この軍は廿四

しる矢二ツ十八さしる矢三ツ九さしたる矢一ツあり

けぬきけきしたる矢と云ハあびくまきしたる矢を矢筋

を一膳二膳といふあり

一 かつ竹の事小笠原の矢箆カシチク云々舟のりけりすて箆

の舟のりてう竹ハ漢弁カシチク一説云々ハ箆カシチクとて矢のりせ

竹を箆カシチクとす取の竹カシチクと云ハれは説書唐竹と記

せ書もあれと唐の字ハ假字あり射字ハ書云小笠

原引目糸箆ハ竹の根の箆カシチクと云カシチクと云ハれは

箆カシチクと云ハれは箆カシチクの皮をけりて云々カシチクテ箆ニ十スヲ云ナリ

一 矢カシチクの事カシチクの字ハイヨウとてツとよむ外の

矢ハいつれも竹のりを以て箆カシチクと造る多れと征矢の篋

の末をえりて箆カシチクとて形筒のりてあれハ志云々といふ

夫木抄知家  
か竹のり  
まきか竹  
まきか竹

又一説云竹の節と節との間をヨと云ヨハヤシの略  
注之古字は 異体のものむろも志のせれと云せぬ  
のの多くもあつたといふりけふのりといふら別あつた  
を知らず外の字はいぬを以て矣若くすれを征矣  
限をりを用竹のもの所を表りて管すれは志の云

貞丈雜記十

たしに記すに  
たしに記すに

